



HS-9921 中西氏結膜弛緩症鑷子

結膜弛緩症のディスポパクレンを用いた結膜焼灼手術用鑷子。弛緩結膜をしっかりと把持できるように先端のカーブを強膜の形状に合わせてあります。これにより術後、強膜への接着がより確実になります。

全長:107mm

ご指導:北里大学病院 ドライアイ外来 中西 基 先生

【 結膜弛緩症手術 】

加齢により発症されると考えられている結膜弛緩症は、下方涙液メニスカスの流路を占拠し流液の原因となるだけでなく、角膜や眼瞼縁への接触により異物感の原因ともなります。※実際は涙液分泌量が低下しており、異物感の症状がもっとも多い。

結膜弛緩症の治療は、自覚症状が無ければ必要ありませんが、症状に応じて人工涙液やステロイドなどの点眼治療が行われ、これらの治療が奏功しない異物感や間欠性流液などの原因が弛緩結膜によって説明可能であった場合に手術治療が選択されます。

従来の弛緩結膜の切除は短縮量の定量に経験を要し、創口離解の危険性から外来での手術は難しい。そこでディスポパクレンと鑷子を用いた術式であれば、手技の煩雑さがなく、結膜切開を行わない事から、外来手術を可能とする画期的方法です。

この方法では450~650℃の高温になるディスポパクレンと弛緩結膜をしっかりと把持できる鑷子を用いる事により弛緩結膜を短縮させるだけでなく、強膜への接着に優れた効果を期待できます。

■ 参考文献

臨床眼科 第65巻第3号 「ディスポパクレンを用いた結膜弛緩症手術の短期成績」 北里大学医学部眼科学教室・大和市立病院 中西 基

動画ございます。ご要望くださいませ。

